

子供と遊び場

村山なほ美

私たちは、自然の恩恵を受けて生活し、遊んでまいりました。春には小川で魚をとり、夕陽の沈むころ、あぜ道をどろんこになって帰って、母に叱られたり、夏には

土手のとんぼやちようちよをどこまでも追いかけて行ったりしました。秋には農ぼつちにかけて遊んだり冬には霜柱を踏みながら、短い日差しの中で影踏みをしたりしてよく遊んだものでした。自然環境の整った中で育った私たちは、いつになってもふるさとの数々の思い出を忘れることがないでしょう。

ところが、急激な都市化の波が地方にまで押し寄せ、企業開発に伴う人口増加によって、宅地造成、工業用地と、今まで絶好の遊び場であった野原が、宅地が、鉄線をはりめぐられて、ブルドーザーの音が鳴り響いており、子どもたちは次々と遊び場を追われています。それでもアスファルトの狭い路地を利用して遊んでいる子供は結構あります。確かに子供は、どこでも遊べる

だけの力を持っています。子供は遊びが本業ですから。しかし、私たち大人は、子供の安全性を考えて、遊びを束縛しているのではないのでしょうか。自然の中で生活し土をいじり、どろんこになって遊んだり、鳥や虫、魚や草花に直接手を触れて感じる喜びの大切さを無視して通することはできません。

子どもは生まれてから、なめる、見る、さわる、いじる、こわすなど何度もくり返す経験、自分の体で触れることによつて、ことばも覚えて行きます。美しいものは美しいものに体を通してみて初めて「美しい」ということばを把握することができるとは思いません。また、そこには感じたことを素直に表現するところの心の寛容さも含まれていることは言うまでもありません。

視聴覚文化の発達に伴ない、茶の間の中で遊び、茶の間の中でおぼけ程度に残された自然を羨やましくながめることに何の抵抗も感じなくなる日が来るのではないかと思っただけでも、非常な戦慄を覚えずにはいられません。